

漢詩神奈川

神漢連総会開かれ、新体制成る

六月二十一日、神奈川近代文学館ホールにおいて、神漢連の第十二回総会が開催されました。当日は低気圧の接近による、前夜からの風雨の激しい日にもかかわらず、顧問である石川忠久先生、窪寺啓先生のご臨席を賜り、総勢六十余名の出席でした。

冒頭、五日前に急逝された田原健一副会長を悼む黙祷のあと、水城まゆみ議長の開会の言葉に続き、岡崎満義会長（欠席）から届けられた挨拶文が代読されました。

その概要は次の通りです。「神漢連は二〇〇六年に六十数名の会員で旗揚げして以来、昨年十周年を迎え会員は三百名ほどにまで増えました。この原動力は、中山清前会長、田原健一前事務局長の始めた、初心者入門講座と寺子屋式個別指導の成功、また、この五年間進めてきた「漢詩を学ぶ」に加えて「漢詩で遊ぶ」のスローガンにより漢詩のすそ野が広がったこと、そして創設以来、石川、窪寺両先生からご支援があったことです。今後、三村公二新会長のもと、神奈川の新方式を更に

発展すべく会員の皆様と共に推し進めて下さい」。

次いで、三村事務局長から活動報告、十周年記念行事報告、今後の活動計画の提案、続いて決算報告、予算計画、規約改定案、人事新体制が提案され、幾つかの質疑のあといずれも承認されました。

総会議事の終了後、会員のほか外来の人も加わって、石川先生の講演「陸游の詩」八首について、楽しく有益な講演が九十分間に行われました。

この後、隣にあるホテルポートヒルに移って懇親会が催され三十五名の参加をみました。室橋執行理事の司会により、余興、裏話など石川先生とともに会員相互の親睦を深めることができました。

なお、石川先生が懇親会の席において即興で作られた賀詩を紹介します。

（中島龍一）

第21号

神奈川県漢詩連盟
事務局

神奈川県海老名市
浜田町16-9
TEL-FAX
046-233-7641

発行人 三村 公二
編集人 高津 有二

偶成

欲冒荒天赴佳會

荒天を冒して佳会に赴かんと欲す

可驚神漢雅筵情

驚くべし神漢雅筵の情

先賢亡後後賢在

先賢亡じし後 後賢在り

何事綿綿有不成

何事か綿々成らざる有らん

石川岳堂



右より、三村新会長、水城、中島 両副会長

会長就任にあたって

三村 公一

初心者入門講座／研修会／吟行会を三本柱として今の神漢連の基礎を築かれたのは故中山初代会長で、石川先生がおっしゃる「金河新様式」の盤石の基礎を作られたのが岡崎前会長である。二代にわたる極めて優れた指導者の下で神漢連はここまで成長してきたのだが、この度、私がおのあとを次いで三代目の会長になることになった。徳川幕府が三百年も続いたのは三代目の家光が、就任当座は無事に勤まるだろうかと心配されていたにもかかわらず、彼を支える人達の力もあつて徳川十五代の基礎を作ったのだといわれている。幸いにも私には家光同様サポートしてくれる優れた多くの仲間がいる。このサポートがある限り、たとえ力は先の二人の会長には及ばなくても、山椒は小粒でもピリリと辛い」を目標に頑張れるであろうと気を引き締めている。先日、ある先輩女性会員の方から、「会長は風を受けて大空を悠然と泳ぐ鯉のぼりのような存在でなければいけません」との優しいが、厳しい御助言を頂いた。この言葉を胸に刻んで、皆様方からの暖かい風をたくさん頂けるよう努めていきたいというのが今の私の心境である。

私は岡崎前会長の下でこの二年九ヶ月、私なりの考えも加えて事務局長を務めてきたので、会長になつても「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」を基本として神漢連の諸問題に取り組んでいくという姿勢に変わりはない。五月の全

日本漢詩連盟理事会・代議員会で私は「皆さんは漢詩連盟を、漢詩を作る人だけの会にしたいのですか、それとも漢詩が好きなたが集う会にしたいのですか、どちらですか」と声を大にして申し上げた。この発言は三月の神漢連漢詩大会で石川忠久先生のご講演を聞きに四百人も多くの方々が集まったという事実を背景にしている。漢詩が好きだという人は我々が想像しているよりはるかに多く、漢詩連盟の会員数が伸び悩んでいるのは、関係者が作詩にこだわるあまりに漢詩好きという方々を迎え入れる努力をしていない事が原因だと申し上げたかったのである。漢詩は決して絶滅危惧種ではないと思う。

私の会長としての最大の使命は、神漢連を漢詩を作る人だけの会にするのではなく、会員が自由に漢詩を楽しめる環境、漢詩で遊べる場を提供していく事だと考えている。竹林舎の先生方による漢詩鑑賞会の更なる充実、サークル毎の作詩以外の自由な活動、連盟以外の詩吟界、書道界とのコラボ、中華街との連携の実績を作ったように地元団体とのコラボ等に引き続き取り組んでいきたい。又、漢詩フェスティバルで「二文字十二文字十三文字」を並べて一句作る遊びに多くの方が興味を持たれ、中には入門講座を受講したいという人も出てきたように、漢詩初めてという方の為に、更には、これから漢詩作りに取り組みたいという若い人達の為に、今までの詩語集のみに頼った漢詩の取り上げ方とは異なる「スマホ(パソコン)で漢詩」の活動を強化

して全国レベルに広げていきたいと考えている。一方、漢詩作法の各人の詩力向上については、聯珠詩格の勉強会のような中級講座の充実も重要なことは言うまでもない。

昨年より、全日本漢詩連盟を頂点とする新しい全国組織が確立された。神漢連はこれらの活動をベースに全国の仲間の先頭に立って漢詩界の裾野を広げていく努力をしていく事も重要な仕事であろう。やりたい事、やらなければならない事は多いが、その具体的な進め方については順次皆様方にご提案していきたいと考えているので、よろしくお願い申し上げます。

事務局長就任にあたって

高津 有二

八年前、神漢連の門を叩いた時に大変お世話になったのが当時の田原事務局長でした。

この度、四代目の事務局長に就任する五日前に田原さんと幽明境を異にするとは一体誰が想像したでしょうか。声が大きい位が取り得の浅学菲才の身でありながらお引き受けした以上、歴代会長が敷かれた神漢連のよき伝統である「漢詩を学び、漢詩で遊ぶ」を楽しく実践していくことが、事務局としての責務であると考えています。このためには、会員の皆さんの叱咤激励と絶大な協力なくしては実現できるものではありません。新三村会長のよき女房役として、全力投球することを田原さんの御霊にお誓い申し上げて、就任のご挨拶いたします。

次の十年への大いなる期待

—岡崎会長退任挨拶—

岡崎 満義

どんな組織でもそれが大きくても小さくても組織の長の一番大切なことは、あらゆる活動の場に姿を見せること、いろんな人と肉声で語り合うこと、それが最低限の義務だと思ってきた。それがここ二年間、家庭の事情でできなくなり、神漢連のほとんどの活動を欠席してしまい、皆さんに申し訳なく、心苦しい日々だった。その間三村公二事務局長を中心に理事、運営委員の方々の獅子奮迅の働きで十二分にカバーして頂き、神漢連はよりパワフルに動き初めていると思っている。本当にありがたいことだった。

学者肌の厳しい故・中山清前会長と初心者入門講座で硬軟とりまぜた寺子屋方式を作り石川岳堂先生に「金河の新方式」と称えてもらった田原健一前事務局長のキメ細かい教室運営を有り難く受け継いだ。この初心者講座の成功こそが神漢連発展の大なるバネであった。この貴重な財産を次世代にそっくりバトンタッチしたいとずっと思ってきた。

創設十周年を迎えた神漢連の次の飛躍は三村公二会長にかかっている。何の心配もない。更なる発展をワクワクしながら見守っている。会員諸氏のご協力をお願いします。

平成二十八年年度決算・二十九年年度予算

平成二十九年六月二十一日の総会で承認済です。

平成29年度予算書			平成28年度10周年事業基金決算書			平成28年度一般会計決算書		
区分	費目	金額	区分	費目	金額	区分	費目	金額
収入	前年より繰越	382,103	収入	經常会計基金	500,000	収入	前年度繰越金	508,977
	年度会費	563,000		協賛金	577,000		年度会費	508,000
	29年度先納会費他	40,000		その他(総額会費、記念誌頒布代等)	1,811,860		行事参加費	337,000
	行事参加費	705,000		合計	2,888,860		その他収入	272,330
	その他の収入	989,500		記念式典	579,061		合計	1,626,307
	収入合計	2,679,603	記念式典	147,540	支出	經常支出	247,047	
支出	經常支出	520,000	記念誌(会報)発行	1,431,379		行事費	271,072	
	行事費	690,000	遠征大会・フェスティバル	461,860		經常外支出	686,085	
	その他の支出	650,000	トートバック製作	455,105		合計	1,204,204	
	支出合計	1,860,000	合計	3,074,945		名目繰越	422,103	
繰越		819,603	基金残高		-186,085	実質繰越(29年度分先納除く)	382,103	
			一般会計より繰越		186,085			
			繰越後残高		0			

平成二十九年度人事

☆理事

玉井 幸久 石川省吾 古田 光子
 岡田 泰男 横山 真吾 桜庭 慎吾

☆執行理事(役職)

三村公二(会長・新任)
 水城まゆみ(副会長) 中島龍一(副会長・新任) 高津有二(事務局長・新任) 香取和之(事務局次長・新任)
 吉岡 昭夫 室橋 幸子 川上修己
 飯島 敏雄 瀧川 智志 喜多基(新任)

☆監事

柴田 洋(執行理事より異動)
 松井 秀人(新任)

☆特別相談役

岡崎 満義(新任)

☆相談役

住田 笛雄(新任)

☆顧問

石川 忠久 窪寺 啓 浅岡 清明
 城田 六郎 三上 光敏(新任)
 池上 一利(新任)

☆運営委員

中島 義和 山口 幸雄
 中野 雅利男 家吉 幸一 犬飼 堯
 新井 治仁(新任) 大森 冽子(新任)
 山岡 健郎(新任) 岩波 弘道(新任)
 橋本 孝一(新任) 牛山 知彦(新任)

平成二十八年年度総会 および神漢連 創立十周年記念式典

平成二十八年十月十九日(水)、まだ秋の薔薇が咲く港の見える丘公園内の神奈川近代文学館ホールにおいて、創立十周年の記念式典及び第十一回総会が開催された。総勢百名強の出席者であった。

まず総会が先行して開催され、時間を四十分間に短縮して、岡崎会長の挨拶に始まり事業報告、決算報告、会計監査と進み、平成二十八年年度事業計画、予算案、人事案が承認された。

続いて、記念式典に移行し、田原副会長の開会宣言、岡崎会長の式辞(要旨は「漢詩を学ぶ・漢詩で遊ぶ」を神漢連のモットーとしてのびやかに活動ができた実感している)に続いて、顧問であられる石川忠久先生、窪寺啓先生、来賓として神奈川新聞社の丸山孝文化部長、産経新聞社の新井好典横浜総局長様から祝辞をいただきました。神漢連十年の歩みについては、三村事務局長から説明した。感謝状は神漢連創立に関わった五名(岡崎満義・田原健一・水城まゆみ・桜庭慎吾・磯野衛孝の各氏)に授与され、磯野氏が創立時の苦労話を語ってくれた。記念講演が始まる頃には会場の人数も増え

て、石川忠久先生による「神奈川に縁の漢詩」十首について、約二時間にわたる解説があり、作詩をした頼山陽や三島中洲、安積良斎・の人脈や人となりも含めて興味深いお話を聴くことができた。

また別室に各サークル会員による自詠自書色紙、フオト漢詩、詩集などの展示をした。懇親会は中華街の菜香新館において六十六名の参加があり盛大に行われた。

(中島龍一)



後列左から5名感謝状授与者
(磯野、田原、岡崎、桜庭、水城の各氏)

創立十周年記念出版

「歩こう神奈川・漢詩八十景」

神奈川漢詩紀行

当連盟の発足十周年の記念としてこの「神奈川漢詩紀行」を発行した。掲載した八十詩は「神奈川県郷土文学資料 漢詩文編」より、紀行スタイルをとり、箱根からはじめて小田原、大磯、平塚等東海道の宿場や鎌倉、三浦半島を中心に編集している。内容は初心者にも読みやすくするために常用漢字を使用し、詩の背景、読み下し文、語釈・通釈・詩人略伝など詩の理解を容易にしている。

この紀行を手名所に旧跡を訪ねれば一段と興味が深まるものと思われる。(城田六郎)

会報 漢詩神奈川(特別二十号)

「十数年のあゆみ」

神漢連「十周年の歩み」を四十頁の冊子にまとめ、会報第二十号特別記念号として、昨年八月末付で神漢連全会員及び各都県漢詩連盟に配布した。正式なタイトルは、「漢詩を学ぶ・漢詩で遊ぶ―神奈川漢詩連盟十年の歩み」です。連盟の過去の活動が詳しく記載されており、最近入会された方々に役立つ情報が多い数と思われる。これは多くの会員の執筆・協力のもと完成した。(香取和之)

創立十周年記念漢詩大会

平成二十九年三月十六・十七日
 (横浜市開港記念会館にて)

平成二十八年十月十九日(水)の記念式典に引き続き漢詩大会と漢詩フェスティバルを開催した。

漢詩大会 表彰式と記念講演会

漢詩を大いに楽しむ

神奈川県漢詩連盟創立十周年記念漢詩大会は平成二十九年三月十七日(金)、午後一時より横浜市開港記念会館において開催された。

表彰式には、愛知や栃木、山梨などの県外の入賞者を含め、百名余の参加者が集い、神漢連の会長挨拶に続き、来賓の白西紳一郎様(日中協会理事長)、謝成發様(横浜華僑総会



創立十周年記念大会開催・会長挨拶代読

会長)、曾徳深様(横浜中華街発展会協同組合顧問)新井好典様(産経新聞社横浜総局長)、秋山理砂様(神奈川新聞社文化部長)より祝辞を頂いた。

引き続き、表彰状授与は、特別賞十一名、秀作賞九名の代表、入選十一名の代表に順次行われ、受賞者を代表して石川郁三氏(横浜市長賞・栃木県)の謝辞を頂いた。

次に石川忠久先生から特別賞十一首についての選評をいただいた。この選評は、詳しく、わかりやすくしかも面白くお話しされ、会場の参加者にとって大いに参考になるものであった。

つまり、詩がこなれているか、風格があるか、起承転結の構成がとれているか、文字の働きがあるか、用語の上品さや結句のオチの有無などについて丁寧な語っていただき、あたかも漢詩稽古の指南のひとつの感があつた。

ちなみに、応募者は東北から九州に及び、詩の数は二百六十七首(応募者一八八人)であり、高校生(三名)から九十歳代六名(最高齢九十二)まで、男女別では男七割、女三割であった。

特別賞作品の顕彰のために、中国語朗詠を当連盟の若き女性 張穎(チャン・イン)さんによって華やかに謳われ、吟詠は、伴奏を琴古流尺八笙詠会の栗城笙童先生により当連盟の精鋭である吟者七名が順に高らかに詠じ素晴らしい雰囲気醸した。

このあと十分間の休憩をとり 午後三時から記念講演が催された。

この時点で会場の大ホールは一・二階とも満席(四百八十人)となり、立って聞く人が出るほどに至った。

石川先生の人気を改めて知らされた次第であった。会場入り口に準備した説明書三百部が品切れとなり、来場のお客様には大変ご迷惑をおかけしてしまった。

演題の「陶淵明 詩と人生」は帰去来の辞、飲酒など八首の詩について鑑賞しながら陶淵明の生い立ちから役人生活、従軍、田園の隠居生活を説明されて、詩人としての真価と心のうちを教えていただき、漢詩の面白さを味わわせていただいた。(中島龍一)



石川忠久先生の講演

優秀作品の紹介

厳正なる審査の結果は、特別賞十一人、秀作賞九人、入選 十一人、計三十一人(内、神漢連は十一人)であり、特別賞、秀作賞および入選者の漢詩の小冊子の発行を行い関係者に配布した。

特別賞受賞作品

- 横浜市長賞 「横濱中華街吟行」 栃木県 石川郁三
- 川崎市長賞 「稲村崎懐古」 千葉県 田沼裕樹
- 一般社団法人日中協会賞 「伯理提督」 福岡県 瀬戸毅義
- 全日本漢詩連盟会長賞 「横濱中華街即事」 三重県 田中久治
- 神奈川県漢詩連盟会長賞 「菜香新館」 神奈川県 室橋幸子
- 横浜華僑総会賞 「金港中華街」 山梨県 高山一雄
- 横浜中華街発展会協同組合賞 「横濱中華街中秋節」 愛知県 大矢恒久
- 読売新聞社横浜支局長賞 「横濱港龍舟競渡」 福岡県 篠崎義道
- 産経新聞社横浜支局長賞 「暑日讀書」 神奈川県 萬谷美次
- 神奈川新聞社賞 「偶成」 兵庫県 小滝弘志
- テレビ神奈川賞 「夏日観蓮」 兵庫県 山形重則

秀作賞作品

- 「客窗聽雨」 三重県 小川忠治
- 「港市懷舊」 兵庫県 前田隆弘
- 「延曆寺」 神奈川県 蔦 清昭
- 「横濱中華街」 京都府 原 肇
- 「中華街憲章」 神奈川県 嶋内隆行
- 「横濱媽祖廟」 長崎県 藤川俊二郎
- 「絹道探訪」 神奈川県 中野三琴
- 「初夏偶成」 兵庫県 野田佳伸
- 「水餃子」 福井県 川口義夫

入選作品

- 「夏日喜雨」 兵庫県 渡邊和洋
 - 「横濱中華街」 大分県 森田元久
 - 「神奈川縣漢詩連盟」 神奈川県 大谷明史
 - 「過唐人街飯店」 東京都 浦上佳奈
 - 「中華街」 東京都 村田瑛子
 - 「訪新井城址」 神奈川県 松本祐輔
 - 「掃部山公園看井伊直弼像」 神奈川県 三上光敏
 - 「横濱媽祖廟」 神奈川県 高津有二
 - 「横濱中華街新春」 神奈川県 中島義和
 - 「再住院」 神奈川県 犬飼勇雄
 - 「横濱中華街」 東京都 中山正道
- 尚、役員詠草は省略します。

横浜市長賞

栃木県 陽山 石川郁三
 横濱中華街吟行會 横濱中華街吟行會
 關帝廟邊聞異香 關帝廟邊 異香を聞き
 徘徊金港會華堂 金港を徘徊して華堂に会す
 同遊皆是風流士 同遊皆是 風流の士
 聯句共成飛羽觴 聯句共に成して羽觴を飛ばす

横浜市長賞を受賞して

神奈川県漢詩連盟会長

この度図らずも横浜市長賞を頂き、大変光栄に存じております。又、石川先生から身に余るご講評を賜り、感激いたしました。今回の作品は、平成二十一年十一月に実施した神奈川県漢詩連盟との交流吟行会が余りにも楽しかったもので、その時の様子をありのまま詩にしたものです。中山前会長のご冥福をお祈りするとともに、当時お世話になった田原様、岡崎様、桜庭様に改めて感謝申し上げます。ありがとうございます。

以下神漢連会員の受賞作品を掲載します。

菜香新館 菜香新館 室橋幸子
 菜茹嘉餡酒興中 菜茹嘉餡 酒興の中
 香芳五味八珍充 香芳し 五味八珍充つ
 新秋語盡濱盟集 新秋語尽くす 浜盟の集い
 館裡華燈歡未終 館裡華燈 歡び未だ終らず

産経新聞社横浜総局長賞

暑日讀書 暑日に書を読む 萬谷美次

雨後炎陽六月天 雨後の炎陽 六月の天

索涼茅屋北窗前 涼を索む 茅屋北窓の前

閑繡亂秩追先哲 閑に乱秩を繡いて先哲を追えば

忽到南柯槐樹邊 忽ち到る南柯 槐樹の辺

秀作賞作品

延曆寺 延曆寺 蕪 清昭

叡山琶水已深秋 叡山 琶水 已に深秋

林徑羊腸到梵樓 林徑は羊腸 梵樓に到る

根本中堂靈氣滿 根本中堂に靈氣満ちて

絶無塵處法燈幽 絶えて塵無き処 法燈幽かなり

中華街憲章 中華街憲章 島内隆行

温故知新百世傳 温故知新 百世に伝えん

善隣友好志逾堅 善隣友好 志 逾堅し

古今墨守先人誠 古今墨守す先人の誠

千客萬來關帝縁 千客万来 関帝の縁

絹道探訪 シルクロード 絹道探訪 中野三琴

砂塵縹渺接天遙 砂塵縹 渺として天に接して遙かなり

人馬踰踰怒颯颯 人馬踰踰 怒颯颯ぶく

露宿今宵廢墟跡 露宿今宵 廢墟の跡

樓蘭猶遠客心焦 樓蘭猶遠く 客心焦る

入選作品

神奈川縣漢詩連盟 神奈川縣漢詩連盟 大谷明史

十歳已經神漢連 十歳已に経たり神漢連

鷗盟師弟列詩筵 鷗盟の師弟 詩筵に列す

每春花下迎新進 每春 花下に新進を迎え

同學同遊期百年 同に字び同に遊び百年を期す

訪新井城址 新井城址を訪ぬ 松本祐輔

斜通間道獨徘徊 斜に通ず間道 獨り徘徊す

堅壘牙城安在哉 堅壘の牙城 安に在り哉

惟有悲風吹蔓草 惟悲風 蔓草を吹く有り

古碑銘刻没青苔 古碑の銘刻 青苔に没す

掃部山公園看井伊直弼像 三上光敏

登來丘阜雨晴時 登り来る丘阜 雨晴る時

淨域山櫻發滿枝 淨域の山桜 滿枝に発く

束帶昂然瞰金港 束帶昂然として 金港を瞰し

何關花事獨顰眉 何ぞ関せん花事 獨り眉を顰める

横濱媽祖廟 横濱媽祖廟 高津有二

天妃降誕水雲郷 天妃降誕 水雲の郷

欲救萬民靈澤昌 万民を救わんと欲し 靈沢昌んなり

廟宇一新今十歳 廟宇一新 今十歳

紅薨丹梅映朝陽 紅薨丹梅 朝陽に映す

横濱中華街新春 横濱中華街新春

中島義和

三朝金港太平春 三朝の金港 太平の春

熱鬧華街勾引人 熱鬧の華街 人を勾引す

八宝菜盈餐卓上 八宝の菜は盈つ 餐卓の上

東坡肉美酒千巡 東坡の肉は美く 酒千巡す

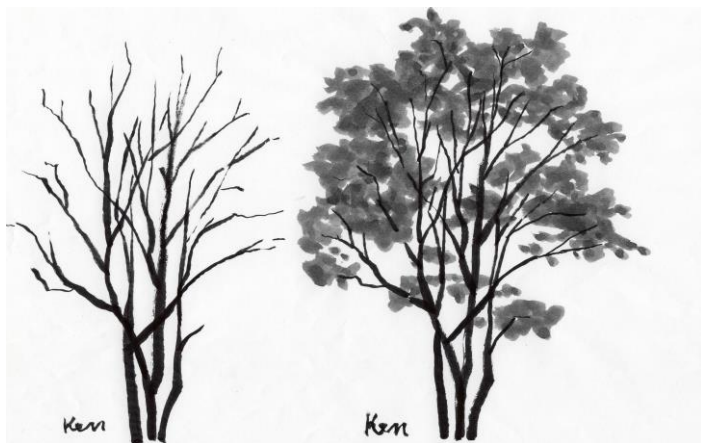
再住院 再び住院す 犬飼勇雄

寬解十年歡喜生 寬解十年 歡喜に生き

時時依舊酒杯傾 時々旧に依り 酒杯傾く

忽然再發荊妻嘆 忽然の再發 荊妻の嘆き

日聽枕頭天譴聲 日び聴く枕頭 天譴の声



田原健一氏画

漢詩フェスティバル

漢詩で遊ぼう

はじめての試み 老若男女楽しく集う

「漢詩で遊ぼう」は、フェスティバルを外部に開かれた催しとすることを狙に、「子供からお年寄りまで、漢詩初心者から作詩のベテランまで、共に楽しめるイベント」として、柏梁体の吟行会に倣って開催された。規則を知らない方には、押韻をも省略し、単に、2・2・3語の意味のある七言一句を、カードやパソコンを活用して創作していただいた。初めての試みであったが、神漢連会員がチューター役として、一対一で対応し、延べ七十名強の参加者と共に句作りを楽しんだ。

(瀧川智志)



初めての漢詩七字に挑戦

自詠自書・フォト漢詩など

自詠自書

この度十周年記念事業書道展には、出品者各位のご熱意により、個性豊かな三十三の作品を展示することができました。又、重要文化財の古建築に於ける展示会場づくりに、前日夜遅くまで、皆さまのご協力のお陰で、一日半の展示期間でしたが約二〇〇名のご来場を頂きました。当日夜、懇親会で石川忠久先生は、即興の漢詩で「詩を為り軸を巻く古堂の中」と玉韻を詠ぜられ(吟者・住田先生)、私達一同感激でした。心から自詠自書の発展を期待致します。

(上田尤子)



フォト漢詩好評!

五友会と七歩会の会員四名からフォト漢詩十点が出展され、多くの来訪者の関心を引きました。何人もの方から撮影場所や被写体についての質問やお褒めの言葉があり、新しいジャンルとして面白いとの感想も頂きました。一般の方が漢詩に触れる機会をフォト漢詩の活用で増やせないかと考えております。

(喜多 基)

漢詩「トートバッグ」の製作

これも十周年記念行事の一つとして製作している。バッグは二種類あり、表側はいずれも全漢詩連会長の石川忠久先生の揮毫による李白の「静夜思」、裏側には神漢連田原健一副会長の画筆により『窓辺から月を眺める女性の図』ともうひとつは『漢詩大会の会場となったよこはま開港記念館のジャックタワー』が画かれている。とても味わい深いものに仕上がっている。

ご希望の方は実費(一枚一五〇〇円)で頒布いたします。

連絡先 〒二二五〇〇一七 川崎市麻生区王禅寺西二・一九・三 三村公二 方

TEL/FAX 044-965-4950

静夜思

李白

牀前看月光

牀前 月光を見る

疑是地上霜

疑うらくはこれ地上の霜かと

挙頭望山月

頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷

頭を低れて故郷を思う



平成二十八年度 神漢連の活動

千代田岳精会結成

「漢詩が作れるようになる会をめざして」

(千代田岳精会漢詩研究部)

昨年十一月に詩吟の会として三十周年を迎えるにあたり、「俳句の会」、「剣舞舞」、「演奏の会」は出来ていましたが、「漢詩を作る会」がありませんでした。

そこで三十年という記念すべき年に「漢詩を自分で作れて、それを吟ずる」という高い目標を持って会を作りました。発足時の会員も三十周年大会練習と重なり、毎月の詩稿がなかなかできないということが多くなり、二十名がメンバーとなりました。



桜庭先生、飯島先生、および香取先生には熱心にご指導いただき感謝しております。ある教場では忘年会で二名のメンバーが自詠、自吟を発表して盛り上がりました。

今年は二年目を迎えましたが、この会を楽しみしているメンバーですので、皆自詠、自吟を目指して漢詩作りに努力してくれることと期待しています。(山口隆久)

十期会結成(初心者講座十期生)

十期会は、平成二十八年度の初心者コースの第十期昨年の七月に終了した。三十三名の中から、希望者十二名で結成し、同年九月から活動を開始した。サークル名は、講座十期生の集まりであり、無理なく決まった。活動は奇数月の第三木曜日に、横浜市の南区公民館で、高津有二、川上修己両先生のご指導の下に研鑽を重ねている。真に残念なことに、十期会は全員が男性で、些かさっぱりとした感無きにも非ずで、何かの機会に女性陣が数名入会されることを心待ちにしている。会の目標としては、何分、目下はよちよち歩きの会ではあるが、先輩サークルの後を追って、五年先を目処に、サークル詩集を纏めたいと考えている。(中野雅利男)

十期会に参加して

漢詩、漢文は学校で習っていた頃から好きで、その時知った「不知為不知是知也」や、「天知神知我知、云々」などはずっと私の行

動規範の一つでした。三年前に「漢詩と中国書道、篆刻」のユニークかつ素晴らしい老師に出会い、自作の漢詩を書き篆刻作品にすべて資料を集め始めました。しかし、この間一首も形になりません。それが、初心者講座を受けて一ヶ月で曲がりなりにも一首が成りました。住田先生、桜庭先生、田原副会長のご指導を受け、卒業制作の作品が十周年漢詩大会で秀作賞を頂く幸運にも恵まれました。良き師があればこそで、お礼の申し上げようもございません。

昨年九月から高津、川上両先生のご指導のもと、十期会の活動が始まりました。私にはまだ漢詩の勘所がつかめていないので、先日の定例会でも原型をとどめない程のご批評を受けました。良い詩を作れるようになることが神漢連へのご恩返しの一つと考え、精進を続けたいと思います。(蔦 清昭)



漢詩鑑賞会の活動

漢詩鑑賞会 A

漢詩鑑賞会Aは、玉井幸久先生の唐詩を鑑賞する講座で、平成二十六年に開講し、月一回の定例会で、孟浩然、李白、杜甫、白居易の生涯をたどり、この五月から王維に入っている。例会は三十五回を数え、毎回三十名強の出席者で、盛況です。
(瀧川智志)

漢詩鑑賞会 B

この鑑賞会Bは発足当時から行ってきました「唐詩選画本」の七言絶句の鑑賞を輪番制で行ってきました。これは先の三月で終了しました。新たに五月より「聯珠詩格」(近畿漢詩連盟叢書・大野修作校閲)を教材として詩の鑑賞と詩格に基づいた作詩の勉強を開始しました。参加者有志の提出詩の批正と検討も行っていきます。講師は住田笛雄先生をはじめとして川上修己、水城まゆみ、池上一利の各氏が担当します。
(川上修己)

漢詩鑑賞会 C

発足当時から数えてこの六月で二十二回となります。解説・鑑賞した詩は五十八ページまでとなりほぼ半数になります。参加者は常に三十数名を数え盛会となっております。講師は城田六郎先生をはじめとし、桜庭慎吾、住田笛雄の各先生のご努力に感謝しております。
(川上修己)

霧笛女子会

二十八年度は六回。古田先生による「長恨歌」、「焦仲卿妻」、八月のみ住田先生の「赤壁賦」を鑑賞。閉会後のお茶会でも盛り上がる。場所は、石川町駅近くの県立かながわ労働プラザ。参加者は十五名。気軽に参加して女子ならではの会話を楽しませるか。途中からの参加も大歓迎です。
(小菅幸枝)

横浜港吟行会

初の海上遊覧吟行会

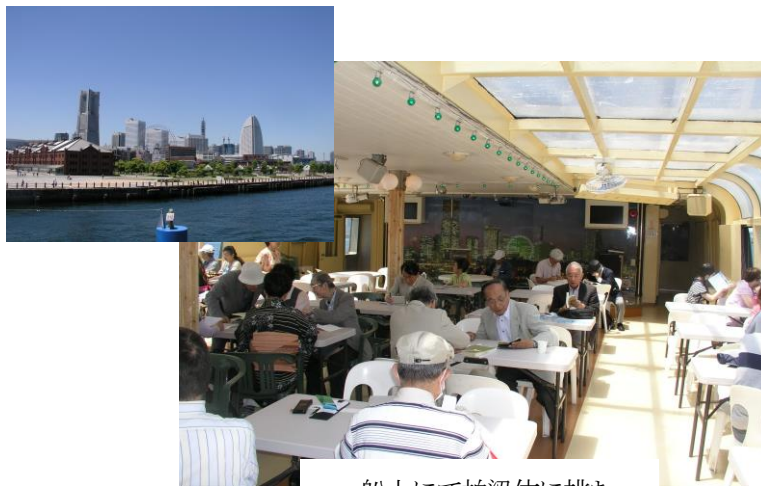
初夏の横浜港一周クルーズ
平成二十八年五月十二日、五月晴れに恵まれ、船上から青い海、ベイブリッジ、高層ビル、房総半島を眺めながらの横浜港周遊の吟行会が行われた。当日は、三十五名が参加し、下船後の懇親会では恒例の柏梁体が披露され、すべての句に石川先生の懇切な批評があり、盛会裏にお開きとなった。石川、窪寺両先生の玉韻は次の通りです。
(高津有二)

石川先生玉韻

朝乗畫舫度薰風 朝に画舫に乗れば 薰風度る
吟友詩盟興不窮 吟友 詩盟 興 窮まらず
金港灣橋一過後 金港 灣橋 一過の後
靈峰遠望翠風中 靈峰 遠く望む 翠風の中

窪寺先生玉韻

金港傲船潮碧深 金港 船を傲えば 潮碧 深し
倚舷短帽海風侵 舷に倚れば 短帽 海風侵かす
私虞時作孟嘉亞 私かに虞る 時に作す 孟嘉の亜
疎髮何勝挿一簪 疎髮 何ぞ勝せんや 一簪を挿すを



船上にて柏梁体に挑む

神漢連 第十二回吟行会 柏梁体

(歌韻・麻韻) 平成二十八年五月十二日

◎優秀句 ○優良句

蛙聲閣閣雨絲斜 松井 秀人
潮平如油雨天遮 岡田 泰男
縹渺銀海受風多 長岡 巨知
天晴風爽樂融和 平賀 康雄

- 一聲鳶舞波鳴鴉 梅村 郁郎
- 陽光燦燦浪如磨 三上 光敏
- 長風弄潮鳥篆沙 中野 三琴
- 海上遙望新綠阿 桜庭 慎吾
- 初夏海濱芍藥芽 池上 一利
- 薰風樹下美人車 山口 幸雄
- 碧昊白波顔若花 室橋 幸子
- 渦潮風起躍清波 柴田 洋
- 晴天船上望青螺 永野 澄
- 高樓聳天並運河 中島 龍一
- 櫛比瓊樓近酒家 水城まゆみ
- 大瀛泛舸鷗盟奢 川上 修己
- 醉船醉景醉仙霞 城田 六郎
- 玄船甚揺酔夢婆 富沢 正永
- 金港形勝酔酒歌 飯島 敏雄
- 軌軸斬新大足誇 住田 笛雄
- 繁華致處十分加 村上 良明
- 船上一句思無邪 瀧川 智志
- 臨景苦吟徒八又 石川 忠久
- 碧天風爽動詩魔 高津 有二
- 餐食塵頭競麗華 田原 健一
- 畫船蹴濤亂玉葩 秋吉 邦雄
- 短帽風吹思孟嘉 窪寺 啓
- 回船鷗影映窓紗 三村 公二
- 海上長橋繫兩堤 吉岡 昭夫
- 眼前蹴波大船過 古田 光子
- 雲外遙望玉蓮荷 上田 尤子
- 富峰不見君莫嗟 三浦 哲郎
- 夏光散海白雲餘 小菅 幸枝



養商術後幻覽に苦しむ(90×350cm)

詠自書され、近作を展べたもので、広い会場の四壁を圧する気迫に満ちた展覧会であった。そして、全日本漢詩連盟・漢詩大会で文部科学大臣賞の栄に輝いた黄山初陽を始め、全国漢詩大会の出詠作品、また毎年恒例の訪中の旅程で制作された「中国書法史蹟七律詩」シリーズ、そして硬筆による旅行・写生・日常詠の作品群は先生の真摯な詩作への傾注を窺わせるものである。

今回展の圧巻は、二年前の胃の手術を受けられた時の経験にもとづく、幻覚に「苦しむ」と題された七絶で、大書された襲来の魍魎と

◎海涯更又有天涯 志村 典子

「米寿記念」第五回個展
石川芳雲詩書展開かる

神漢連創立以来の理事である石川芳雲先生詩書展が日本書道学院・日本ペン習字研究会主催により、平成二十九年六月二十日〜二十五日の間、東京銀座画廊・美術館で開催された。今回は特に詩書展と銘打たれ、全作品を自

魍魎と」の九字の墨痕には、幻覚が妖怪に変化し一晩まんじりとも出来なかつた先生の驚愕が率直に表白されている。

詩書展の後、六月二十四日に東京プリンスホテルでの米寿記念の祝賀会には三村新会長・水城副会長他が出席し、関係の諸団体から多くの祝辞が寄せられた。その中で芳雲先生が十餘年来師事されている国士館大学教授の鷲野正明先生が祝辞で、芳雲先生はこれまでの書作で最高級の水準を示されたが、今後は当代における第一級の詩人として評価されるでしょう」と申され、印象的であった。また著名な書道文化研究家の西嶋慎一氏が、芳雲先生には、千里の道を行き、万巻の書を読む気概がある」と評され、その蘊蓄が「芳雲芸術」の完成をもたらしたとの言葉には深い感銘を覚えた。

最後に芳雲先生は、「挨拶のなかで、少年時代に、日立製作所に勤めていた父親から数学を勉強せよと小遣いを貰ったが、自分は書に関する本ばかりを買って父親から叱られた……」と述べられた。この少年時代の志を心に深く刻み米寿を迎えられた先生は今、自己の芸術を全うされようとしている。

茲に賀詩を記してお祝いしたい。

賀石川芳雲先生米寿記念詩書展

大志少年心愈堅 墨林版籍抵零錢

翻濤自在淋漓濕 重壽將窮風雅全

これからも益々お元気に制作にお励みいただき様、願って止まない。

会員の声

(桜庭慎吾)

漢詩囲碁研究会が発足

— 会員募集中 —

漢詩囲碁研究会が玉井幸久理事を代表者、板本健作さんを幹事にして、囲碁と漢詩を楽しむことになり、既に四回催しを執行致しました。次回九月の予定は九月一九日(火)です。杜甫、王維、白居易、劉禹錫、杜牧、李商隱、蘇軾などみな囲碁を打つたので我々も、ということなのです。

奇数月の二ヶ月毎の第二または第三火曜日に石川町のかながわ労働プラザで開催いたします。囲碁をされている方々の入会をお待ちしています。お問い合わせは神奈川漢詩連へ。

桜美林大学孔子学院

漢詩朗誦・創作発表大会

三村公二

孔子学院事務局から「二〇一七年一月二十八日(土)に淵野辺キャンパスで頭書の漢詩朗詠・創作発表会が開催されるので神漢連からも参加していただけませんか」と突然の連絡があったのは開催日の十日前であった。概略の説明は受けたが、詳細は分からないし、

分かった所で期日が迫っているので皆さんに連絡しようもないので、取りあえず私一人、創作の部なら中国語は不要だろうと参加してみた。

発表会の内容は
一、漢詩朗誦の部

自分の好きな漢詩を中国語で朗誦し、その巧拙を競う。アトラクションを付けても良い(剣舞、人形劇があった)。中国語を母国語とする方は参加不可。

二、創作の部

自作の漢詩を発表(できれば旧字を使わない)。発表は先ず、中国語で朗誦、次いで(日本語で可)書下し文、詩意を説明。参加者の国籍は問わない。

審査員は

審査委員長：佐藤保先生

審査委員：光田明正／植田握雄／呉悦／楊

光俊の各先生

という事で、創作の部でも中国語の朗誦が必要だと分かったが、急遽、孔子学院の学生さんの協力を仰ぎ、日本語で難しい詩語の説明をし、書下し文は中国語の朗誦が出来なかったという事で即興の詩吟で乗りきった。

これではとても入賞はあり得ないなと思っていたら、幸運にも「最優秀賞」を頂くことが出来た。

発表会終了後に佐藤保先生の「続漢詩のことはー漢語の諸相」という非常に興味ある

御講演があった。

後日、楊光俊孔子学院長から来年は一月二十七日(土)に開催するので神漢連から多数の参加をお願いしますとのお手紙を頂いた。神奈川の地でこんな催しが有り、漢詩の仲間が沢山いることが初めて分かったのは非常に喜びであった。来年案内があったら皆さんにご連絡しますので是非参加してみてください。

秋山采松茸

秋山にて松茸を採す

松朶落釵山澤傍

松朶の落釵 山沢の傍

林間鷺歩願豊穰

林間 鷺歩して 豊穰を願う

誰言此処多尤物

誰か言う 此処尤物多しと

唯在籃中一蕈香

唯だ在り 籃中一蕈の香り

(註)鷺歩、尤物は江戸時代の菅茶山の采茸三首に倣う。



田原健一氏画

神漢連会員「全国漢詩大会」で大活躍

平成二十八年年度

全日本漢詩大会京都大会受賞

受賞おめでとうございます。

(PCで表示できない旧漢字は常用漢字を用いています)

NHK京都放送局賞

鶴陵廟偶成

秋吉 邦雄

亭亭朱廟屹青天

鶴陵廟(鶴岡八幡宮) 偶成

鬱鬱綠雲纍紫烟

鬱々たる緑雲 紫烟を纍つ

磴上偏憐小靈樹

磴上偏えに憐れむ 小靈樹

藥栽期得又千年

藥栽期し得たり 又た千年

佳作

大森 冽子

永福寺覽古

永福寺にて古を覽る(鎌倉永福寺)

曾見翼廊春草充

曾て見る翼廊 春草充つ

干戈幾度九旒功

干戈 幾度 九旒の功

辛艱恰似豆萁恨

辛艱 恰かも似たり豆萁の恨

瞬息榮華一夢中

瞬息 榮華 一夢中

入選

大谷 明史

懷思巴里聖禮拜堂

巴里聖禮拜堂を懷思す

塞河洲島惠風芳

塞河の洲島 惠風芳し

白日明明照聖堂

白日明々 聖堂を照らす

堂裏玻璃大窓牖

堂裏の玻璃 大窓牖

仰瞻紅曜又青煌

仰ぎ瞻る紅曜 又た青煌

過銀閣寺

銀閣寺に過る

水城まゆみ

東山月出映祇林

東山 月出で 祇林に映じ

清影如銀丈室深

清影 銀の如く 丈室深し

水石庭園生淡靄

水石の庭園 淡靄生ず

仙寰無語坐忘心

仙寰 語無く 坐忘の心

斑鳩法隆寺

斑鳩法隆寺

高津 有一

雨霽斑鳩生紫煙

雨霽れ斑鳩 紫煙生ず

五層塔影閱千年

五層の塔影 千年を閱す

金堂夢殿三尊像

金堂夢殿 三尊像

太子遺蹤萬古傳

太子の遺蹤 萬古に伝えん



丹下 和幸

過松島名刹

松島名刹を過る

百島千波映暉暉

百島千波 暉暉に映じ

白帆來往白鷗飛

白帆來往 白鷗飛ぶ

風光獨占瑞巖寺

風光獨占 瑞巖寺

瞑目自開禪定扉

瞑目すれば自ずから開く 禪定の扉

全国ふるさと漢詩コンテスト

佐賀県多久市教育委員会主催

優秀賞

川上 修己

童兒挑西瓜

童兒西瓜に挑む

大瀛森森接遙天

大瀛森々として遙天に接す

盛夏村童遊海邊

盛夏の村童 海邊に遊ぶ

蓋眼奮然揮棍處

眼を蓋い奮然として棍を揮う處

綠球空在寸分先

綠球空しく寸分先に在り

入選

小嶋明紀子

夏尋蘭若

夏蘭若を尋ぬ

午熱衝人古道傍

午熱人を衝く古道の傍ら

獨尋野寺入閑堂

独り野寺を尋ね閑堂に入る

從僧識得禪機後

僧に従いて禪機を識得して後

纔覺松風吹袂涼

纔かに覺ゆ松風 袂を吹きて涼しきを

第一回漱石記念漢詩大会・熊本

漱石記念漢詩大会実行委員会

優秀賞

江亭嘗茗

江亭嘗茗

小嶋明紀子

亭下汲來中冷泉

亭下汲み來たる中冷泉

烏巾煮茗曲欄前

烏巾茗を煮る曲欄の前

閑嘗三椀知春興

閑に三椀を嘗め春興を知る

遙憶風流盧玉川

遙かに憶ふ風流の盧玉川

佳作

柴本 信子

望南米智利富士

南米智利富士を望む

探遍名山路幾重

名山を探ること遍し路幾重なりや

英姿眺望豁心胸

英姿眺望すれば心胸豁たり

誰知祖國扶桑外

誰か知らん祖國扶桑の外に

別有超然不二峰

別に超然たる不二の峰有りとは

入選

三上 光敏

過田原坂戰跡

田原坂戰跡に過る

欲尋戰跡到林丘

戰跡を尋ねんと欲し林丘に到る

忽憶風光幾度秋

忽ち憶う風光 幾度の秋

吶喊砲聲當日事

吶喊砲聲 當日の事

如今荒草影悠悠

如今荒草 影悠悠たり

熊本城懷古

熊本城懷古

川上 修己

茶白山腰千里遙

茶白の山腰 千里遙かなり

青靄黑壁接雲喬

青靄黒壁 雲に接して喬し

堪來兵燹百餘歲

兵燹に堪え來りて百余歳

險塞曾誇天下梟

險塞 曾て誇る天下の梟

諸橋轍次博士記念漢詩大会

諸橋轍次博士記念漢詩大会実行委員会

奨励賞・新潟日報社賞

松井 秀人

過圓覺寺

圓覺寺を過る

松杉千樹綠陰深

松杉千樹 綠陰深し

晚照山門同古今

晚照の山門 古今に同じ

白鹿尋師塵外境

白鹿 師を尋ぬ 塵外の境

鯨音隱隱滿幽襟

鯨音 隱々幽襟に滿つ

奨励賞・NST賞

室橋 幸子

柳塘疎雨

柳塘疎雨

柳條嫋嫋綠將繁

柳條嫋嫋として綠將に繁し

細雨蕭蕭水半渾

細雨蕭々として水半渾る

一別扁舟何日返

一別の扁舟は何れの日にか返らん

佳人沾袖自無言

佳人 袖を沾らして 自ずから言無し

秀作賞

松本 征儀

慶賀一朗達成通算三千安打

一朗通算三千安打を達成するを慶賀す

克己鍊成誰及肩

克己鍊成 誰か肩に及ばん

冠攻走守制於先

攻走守に冠たりて先んずるを制す

元來記錄常更改

元來 記錄 更改常なり

大願球王路八千

大願す球王 路八千

食蛙

蛙を食う 大森 冽子

瀨城過雨亂鳴喧

瀨城の過雨 亂鳴喧し

欲食田鷄喚稚孫

田鷄を食せんと欲し 稚孫喚く

炸煮炒蒸他自美

炸煮 炒蒸 他 自ずから美し

方知口福滿盤存

方に知る 口福は滿盤に存るを

特別賞・八木ヶ鼻賞

大谷 明史

塞下曲

塞下の曲

沙場百里對胡兵

沙場 百里 胡兵に對す

片月孤高已二更

片月 孤り高し 已に二更

遙想東天雲盡處

遙かに想う 東天 雲尽くる処

長安萬戶擣衣聲

長安に万戸 衣を擣つのを聲を



訃報のお知らせ

訃報 田原健一氏

神奈川県漢詩連盟前副会長 田原健一氏は、平成二十九年六月十六日に逝去されました。(享年八十一歳)
ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

ありがとうございます、田原健一さん

神漢連前会長 岡崎満義

神漢連設立以来、事務局長、副会長として屋台骨を支えてきてくれた田原健一さんが六月十六日、左腎細胞ガンで亡くなられた。享年八十一歳。田原さんの最大の功績は故・中山清前会長と組んで初心者入門講座を開き、後に石川忠久全漢連会長から「可看金河新方式」と称された少人数学習の『寺子屋方式』を実現したことだと思う。
このかゆいところに手が届くアフタアケアのよさで、初心者講座の中途脱落者は殆どなくなった。



十年続く初心者講座の中から、毎年次々に人材が育ち。神漢連の活動の中核となつている。強い信念を持つ硬骨漢だったが、何とも言えない愛嬌があった。いつまでも心の中に少年・田原健一が生きているように思っていた。

神漢連の更なる発展の為に使つてほしいという故田原副会長ご生前の遺志だご遺族から多額のご寄付を頂戴した。故人のお気持ちを尊重し、このお金は一般会計から独立させて「田原基金」として有効に活用させていただく事とする。活用対象等の詳細は今後決める予定である。(三村公二)

当連盟の住田笛雄相談役から追悼の詩が寄せられました。

哀悼田原健一先生

田原健一先生を哀悼する 住田籠軒

毎聴清聲響滿堂 毎に聴く清声 滿堂に響くを

詩心熱説自悠揚 詩心熱く説いて 自から悠揚たり

于嗟突忽仙遊去 于嗟突忽 仙遊して去られんとは

静夜空望冷月光 静夜空し望む 月光の冷やかなるを



訃報 秋吉邦雄氏

神奈川県漢詩連盟の会員 秋吉邦雄氏は平成二十八年七月二十六日に逝去されました。(享年八十四歳)
ここに謹んで哀悼の意を表し、

漢詩文の指南役

以文会代表 柴田洋

秋吉さんは、漢字の中から生まれた人生を歩んでこられたが、八十歳から始めた漢詩は険しいと、ご本人曰く驚馬十駕と謙遜されているが以文会では、指南役を買って出た。又漢詩人として詩的なホモ・ルーデンスへと変心をしていた。貴重な人材をなくしたことは非常に残念なことである。

なお、十三ページ掲載の全日本漢詩大会京都大会において、特別賞(NHK京都放送局賞)を受賞されましたが、この授賞式には参加することが叶いませんでした。

訃報 宇津井 寛氏

神奈川県漢詩連盟の会員 宇津井寛氏は、昨年の十一月に逝去されました。(享年九十五歳)
ここに謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

神奈川県漢詩連盟 今後の行事予定

● 初心者入門講座 漢詩の鑑賞と実作 (第十一期生)

- 全五回の講義と実習 ①七月二十六日(水) ②八月二日(水) ③八月十日(木)
④八月十六日(水) ⑤八月三十日(水)
神奈川近代文学館にて 午後一時三〇分より四時三〇分
一度見学に来ませんか。

● 吟行会

- 期日 平成二九年九月二十七日(水)
場所 横須賀港 戦艦三笠見学
会費 三〇〇〇円
申し込み 八月三十一日(木)まで
本会報に同封した振り込み用紙にて参加申し込みとします。

● 研修会

- 例年どおり「投票選句方式」で二グループに分けておこないます。
期日 ①平成二九年十一月八日(水) ②十一月一四日(火)
時間 午後一〜五時
場所 神奈川近代文学館 二階中会議室
詩稿提出 〒216-0033 川崎市宮前区宮崎 6-5-29 中島龍一 宛
締め切り 十月十二日
申し込みは 本会報同封の用紙をご利用ください。

● サークル交流会 (旧バトル漢詩甲子園) 計画中

- 平成三十年度全日本漢詩大会開催 (東京都・神奈川県・千葉県漢詩連盟共同開催)
平成三十年九月八日(土)・九日(日)と決定しています。

編集後記

「漢詩神奈川」第二十号特別記念号・神奈川漢詩連盟十年の歩みを発行して以来約一年が過ぎようとしている。この間に、昨年十月の十周年記念式典、今年の漢詩大会・漢詩フェスティバルと立て続けに大きな行事を行ってきた。実行関係者のご努力と関係会員のご協力により、いずれも盛大に執り行われた。今号の記事に記してある通りである。

特に漢詩フェスティバルの「漢詩で遊ぼう」は新しい試みとして漢詩の初心者に優しく漢詩の作り方が理解してもらえたと思っている。県下の漢詩愛好者が増えることが期待される。今年二十九年度も六月の総会により新人事が発足し、更に今後の発展が期待される。上欄のように複数の行事が予定されている。初心者入門講座は第十一回目となり多くの新会員が増え、新吟社の設立を期待したい。因みに現吟社の会員数を記載する。

- 金星会 (七名) 三水会 (十二名)
好文会 (十名) 詩游会 (十一名)
五友会 (八名) 以文会 (十三名)
七歩会 (十一名) 八起会 (十六名)
岳精会漢詩研究会 (十名)
九詩期会 (二十名)
千代田岳精会 (二十二名)
十期会 (十一名)
霧笛女子会 (十五名)

平成二十九年四月二十日現在
(川上 修己記)